
狩谷零の物語

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狩谷零の物語

【Zコード】

N7627Y

【作者名】

学校嫌い

【あらすじ】

黒い穴に幼なじみ一人と一緒に吸い込まれた狩谷零が飛ばされたのは、テルカ・リュミレス。そこで狩谷零はある一人の男と出会う。彼女の物語はそこから始まった。

「オー、いきなり何か現れたかと思えば・・・なかなか、ビューティフルなレディでえす」

黒い穴に吸い込まれて飛ばされたけど、ここがどこだから全く分からずどうしようかと周りに変な生物がいるにも関わらず、考え込んでいると、背後から突然英語混じりの声が聞こえた。

大きな桜の木に向けっていた視線を、身体ごと後ろに向けて見てみると、そこには長身でほぼ全身が紫に包まれている男性がいた。手には鎌の様な物を持っている。

いや・・・怖いんですけど・・・。

どう見ても本物のそれは、私の命なんかいとも簡単に狩り取つてしまふと思う。何より私には武器になる物なんかないし、仮にあつたとしても、上手く扱える訳もない。頭だつてまだ混乱しているんだから、当たり前だ。

そして、一番の問題は、旭と亜美。

この二人がないこと。

一緒に同じ穴に吸い込まれた筈なのに、ここに来たのは私だけ。もしかしたら三人とも、この見知らぬ土地のどこか、バラバラの場所に飛ばされたのかも知れない。

いつも変な奴が現れたら、旭がどうにかしてくれていた。

見た目は細いけど、旭はずつと身体を鍛えていた。その理由を聞いてみると、旭はこともなげに言つた。

『亜美と霊を守る為だよ』

私は・・・私たちはその言葉が嬉しかった。

私が一人と知り合つたのは、小学校3年生で、二人が2年生の時だつた。2年生の時に、その一人のことは色々と噂なんかで聞いたことはあつたけど、内容は今考えてみればバカらしいものばかりだった。

言つ必要もないほどに。

ある日の体育の授業が終わつて、その日の後片付け係になつていた私は、ドッジボールで使つたボールを籠に入れて倉庫へ押していた。小学生の私に、その籠は結構重い物で、押すのは結構大変だつた。他の子たちは自分じゃなくて良かつたとでも言つ様に・・・いや、実際言つていた。

それを聞きながら、私も心のなかであんたらの時も手伝ってなんかやらない、なんていかにも子どもっぽいことを思つていた。

でも

『一人でがんばるのはえらいけど、むりはしたらダメだよ』

『・・・・・』

雪の様な白い髪を持つ女の子と蒼い髪を持つ男の子が、女の子は元気に、男の子は静かに籠を押すのを手伝つてくれた。

私はその二人が噂の一人の特徴と似ているなとは思つたけど、深く考えずに三人一緒に籠を押した。倉庫に運び終わつて、二人にお礼を言つて自己紹介をすると、二人もしてくれた。

『あたし、たかまちあみ！よろしく～』

その名前を聞いた瞬間、その子が噂の一人だということを知つた。

白い髪に名前まで一致したんだから、小学生だった当時の私にだってすぐに分かつて当然と言えば当然だつと思う。男の子の方に視線を向けると、でもその子は無表情で何も言わず私を見つめていた。

綺麗な紅の瞳を見て、私は何故か顔が赤くなり、顔を逸らした。

『せりー血口紹介へりこしなよー』

パシパシと男の子をたたいている様な音が聞こえて、直後

『のなかあさひ』

と澄んだ声が聞こえてきた。

その一人が噂の一人だつたことなんて、ビックリでも良い気がした。

亜美も旭もどう考へても噂は一つたりとも当て嵌まつていなかつた
し、そもそも私はそんなことは最初から気にしていなかつたんだし・
・・。

『狩谷しづく』

気が付くと私も名乗つていた。

『じづくちゃんかー。綺麗な名前だねー』

そんなことを言われたのは、初めてだつた。実際、後にも先にも、
そんなことを言つてくれたのは亜美だけだつた。

その日は、特に何も起きたことなく、亜美は元気に手を振つて、旭
を引っ張りながら帰つて行つた。

次の日、何故か無性に二人のことが気になつて、知つてゐる人に二人の教室を聞いて昼休みに行つてみると、二人の周りには誰もいなかつた。単にそれだけだったら、可笑しくはなかつたかも知れない。でも、周りの子達は明らかに一人を避けていた。

でも、二人はそんなことを全く気にした様子もなく、おしゃべりをしていた。

正確には一方的に亜美が話していて、それを旭が前日とかわらない無表情で聞いているだけだつた。

本当は優しいのに・・・。

周りの子達にそう、叫びたくなつた。

でも、そんなことをしても意味がないことはなんとなくだけど、理解していた。

見ようともしていない人達に何を言つたところで、何も変わらない。

前日の様に、私は気が付くと教室に入つてまっすぐ一人に向かつていた。

それからは毎日が楽しかつた。

亜美が同性愛に目覚めた時は心配したけど、まあ、相手が私だったから問題はなかつた。

旭も、いつも無表情だったけど、偶に・・・本当にたま～～～にだけど、笑うことがあった。

そして、何故か私はいつの間にか毒舌を吐くようになつていて・・・未だに理由が分からぬけど。

「・・・・ビ」に行つたのかな?」

「?」

「あ」

目の前に武器を持った人がいるのも忘れて、私は昔のことと思い出していて、声を出していた。長身の人の声で現実に引き戻され、小さく声を洩らして、私はまた警戒を始めた。

「オー、オー・・・そんなに構えなくても大丈夫でえす。ミーはコ一になにかするつもりはありません」

鎌を私と自分の中間辺りに投げた訳だから、その言葉に嘘はないと思う。

私も少しだけ警戒を緩めた。

「こんな所で、レディが一人でいてはキケンです。ニーを少しでも信用できるのなら、ついてきてください?」

投げた鎌も拾わず、そう言って背を向ける男性を、私は信用・疑惑＝9：1でついて行くことにした。

確かにここに一人でいても何もできないし、日も沈んできている。

このまま夜になんてなってしまったら、それこそ訳も分からず周りを徘徊している生物によって、殺されてしまうかも知れない。

思つたよりも思い鎌を拾つて、落とさないよう胸元で大事に抱えて、私は男の人の後をついて行つた。

前方には大きな砦の様な物が見えている。

戸惑い・決意

男の人について行つて廻り着いたのは、ずっと見えていた砦。名はデイドン砦と言つらしい。この平原に住む主から、守る為に随分昔に建てられたみたいだけど、見た目は全然そんな風には見えない。

入つた途端に兵士の人に止められたけど、男の人が変わつた趣味の人だから、とかむかつくことを言つてくれた。まあ、お陰で中に入れたけど・・・。そのまま、兵士のキャンプ場に行くと、男の人の知り合いなのか、二人の女の子がいた。

二人とも身長は同じくらいで、一方が赤い髪でもう一方がクリーミー色の髪。髪型は二人とも同じで、ウェーブがかつた髪を側頭部で結んでいる。服装は・・・なんか結構私の服装と近いような気がするんだけど・・・。

ネクタイにカツターシャツ、その上にブレザー・・・っぽいかな？それでスカートでしょ？

同じじゃない？

・・・細かいことは気にしない方が良いのかな？

状況が状況だし。

なんて思つてゐるが、男の人に降りてくるよつに言われた。鎌を抱え直して、降りていき三人と向き合つ。とりあえず鎌を返そうと思ひ、腕を伸ばすと、男の人が「ご苦労様です、と言つて片手で受け取つた。

いつこのつのを見ると、私たち女と男の力の差を感じる。

「さて、貴女はこれからどうしまスか?」

「どうつて・・・とりあえず」こゝがどうだから確かめて、それから幼なじみの一人を捜すけど

「宛はあるのですか?」

「・・・・・ない・・・・けど」

さつきは混乱していたこともあつて、一人もこの地のどこかにいると思つてゐたけど、考えてみれば、私だけが飛ばされてしまつた可能性だつてある。

二人は無事で、私だけがいなくなつたつてことが・・・。

見えない不安に襲われて、もし本当にそつだつたらどうしようかと思つてゐると、

「ミー達と来ませんか？」

男の人が突然そう言った。

「え？」

「ミー達といても、貴女の幼なじみが見つかるとは限りません。ですが、一人で宛もなく捜すよりはベターだと思いませんか？」

それは確かにそうだ。

こんな見知らぬ土地で、しかも変な生物がいる所で、一人で行動していたら、いつ一人を見つけられるかなんて見当も付かない。もしかしたら、見つけられないまま終わってしまうかも知れない。

「どうしマスか？」

「・・・考える時間を見つても、いい？」

「もちろんデス。大事なことデスからね」

「ありがとう」

お礼を言つて、三人に背を向けて、私はキャンプ場を後にした。

入つて来た方とは別の方の出口付近で、遠くを眺めていると、何か輪っかの様な物があることに気付いた。 そういえば、あの大きな桜の木の周りにもあつたっけ？

何なのかは分からぬけど

「きれい」

そう思つた。

「何が？」

「うわー」

「うわあー。」

びっくりして声を上げると、何故か相手も声を上げた。

「あ、それなの」

その娘はさつき、男の人と一緒にいたクリーム色の女の子だった。側にはもう一人の赤い髪の女の子もいて、呆れた様に額に手を当て溜息をついている。

・・・この二人、双子なのかな？

髪の色が違うだけで、後は殆ど一緒に見えるから、多分間違いないと思うけど・・・。

とりあえず、私も驚かせてしまったみたいだから、謝ると、クリーム色の女の子も謝ってきた。

「それで？何が綺麗なのん？」

クリーム色の女の子が再び聞いてきて、私は遠くに見えている光の輪っかを指さしながら、あれ、と言った。二人はそれを確認すると赤髪の女の子が

「ああ、シルトブラスティア結界魔導器か

と言った。

私は何のことか分からず復唱するけど、聞き慣れない言葉だったから、最後まで言えなかつた。

「何だ？まるで初めて聞いたと言う様な顔をしているが？」

「ええ。初めてだから」

「「え？」

何かおかしなことを言つたのか、一人とも少し固まつた。でもすぐに戻つて、そんなことある訳ないだろうと、赤髪の女の子が言つてきた。クリーム色の女の子も頷いている。

「本当に初めてよ。私がいた所にはあんな物なかつたわ

それに、あんな生物も。

「待て。おまえは一体どこから来たんだ？余程の辺境でも無ければ、結界魔導器がないなんてことはまずあり得ないぞ？」

「どこからつて聞かれても・・・」

住んでいた場所を言おうとして、そもそもここが地球なのかどうかが分からぬことに気付いた。そうよ・・・私の知つてゐる限りでも、地球にはあんな物は無かつたし、あんな生物もいない。それなら、私が飛ばされたこの地は、地球じゃない可能性だつてある。

「どうしたのん？」

「・・・・ねえ、この世界の名前つて何？」

クリーム色の女の子と問いただす質問をすると、赤髪の女の子がまた何を言つてゐるんだ？みたいな顔をしたけど、ちゃんと教えてくれた。

「テルカ・リュミース。それがこの世界の名だ」

「テルカ・リュミース……。じゃあ、やっぱり地球じゃないんだ」

自分でも思っていたより、ショックは受けていない。混乱していると言つ自覚がないだけで、本当は混乱しているのかも知れないけど、今はそれで良かった。

地球?と私が言つた単語を反芻している、二人を一度見て、また結界魔導器という物が発している光に目を向ける。

目を閉じると、どこからか吹いた風が私達を通り過ぎていった。

「……」

目を開く。

光景は何も変わらない。

「私、貴女たちと一緒に行く」

「「え？」」

疑問の声を上げる一人を一度見て、私はキャンプ場に戻る為歩き出した。少し遅れて後ろから、二人の足音が聞こえてきて、私を挟む様に歩き、顔を見てきたけど何も言わず私は歩き、キャンプ場に着いた。

二人は立ち止まつた私を追い越して、空を見上げている男の人の側に駆け寄る。

「決まったの『テスか?』

二人の頭を撫でて、次に私を見て男の人は尋ねてきた。

「ええ。貴方たちについて行く」

「ミーの方から誘つておいてなんですが、理由をお聞きしても?」

「ここは、私のいた世界じゃない。だから、何一つ分からない。人でいても、何もできない。だから、ついて行く」

「貴女の世界のことは、追々聞くとして……」

そこで、一刀両葉を切り、

「この世界は『テンジャラス』ことが多いですよ?」

低い声で、睨み付けるように私を見て言った。

その瞳には、明らかな殺意の様な物が込められていた。

ハツキリ言つてかなり怖い。

見える物よりも見えないモノの方が怖いっていつ経験は初めてだ。

でも。

「そんなの分かってる。だから、戦い方を教えて。それも含めて、私は貴方たちについて行くことを決めたから」

だからと言つて止まつてなんていられない。

「いいでしょ。遅くなつてしましましたが、ミーの名はイエガ」と言つマス」

「私はゴーシュ」

「ドロワットよん!」

イエガーに続いて、二人の女の子も名乗った。

赤髪の女の子が「ゴーシュ。

クリーム色の女の子が「ドロワット。

「私は、シズク・カリヤ。これからよろしくお願ひします」

シン・トーレ（龍書隊）

雲「後書きに今私のプロフィールを載せるみたいだけど……変なこと書かないでショウナ?」

作「そんなこと書いたら旭に殺されるって」

雲「それも、そつか。旭って本領になるとどうかくらに強いのかしら?」

作「ああ……」

雲「まあ、『氣』が向いたら『氣』まで見て貰えると嬉しいわ」

作「よろしくお願ひします」

ツン・テレ

テルカ・リュミレースに飛ばされて一年。

必死すぎて、それだけの時間が流れたことに気付いたのは、今日の朝、イエガー達にいきなりおめでとうと言われてからだった。どうしておめでとうなのは、分からぬけど、祝ってくれてのは素直に嬉しかった。

この一年の間に、この世界の基本的なことはイエガーやゴーシュ、ドロワット。それに海凶の爪の人たちから色々と教えて貰った。

エアルやギルド、帝国や古代グライオス文明とか、色々。

戦闘の面でも、大分マシになつたと思う。ゴーシュとドロワットの二人と一緒に戦える位までにはなつてゐるし、そこら辺の魔物が相手ならまず負けることは無いと思つ。

巨大獣は今の私じゃ到底太刀打ちできないけど、いつかは勝ちたいかな？

でも、旭と亜美。一人の手がかりは全く掴めていない。田撃情報があれば、旭はともかく亜美は目立つからすぐに分かると思つ。この

世界は髪の毛の色が染めて無くても色々な色の人が多いけど、白い髪は中々ない。

まあ、一人ほど白い髪の人とは会ったことがあるけど、その人達は男だからな・・・というか後ろ姿からして違ったし。

亜美はもつとちっちゃいからね。

イエガー達も協力してくれているけど、やつぱり広い世界からたつた一人を捜すのは難しいみたい。

もちろん、いない可能性だつてあるけど、そんな簡単に諦められない。

と、背徳の館で朝食を作りながら考えていると

「お腹空いた〜・・・シズちゃん、まだ〜？」

ドロワットがそろそろ限界と言つた感じの声を出した。

イエガー達と一緒に行動するよつになつてから、初めて野宿をした時、そんなことを経験したことが無かつた私は、ご飯位はちゃんとしたいな・・・と思つて、できる限りちゃんとした物を作つていた。ギルドの仕事の時は、そんな余裕は無かつたけど・・・。

街の宿に泊まつた時は、やつとまともなご飯が食べられるつて思つ

て、食べたら思つた以上に美味しいくて、結構いっぱい食べた。

でも、何故かイエガー達は渋い顔をしていて、どこか納得いっていない感じだった。

どうしたのか聞くと、

『シズクの『はん』の方がいいでえす』

『私も（です）』

三人揃つてそう言つた。

なんか、作つてゐる内に上達してゐたみたいで、三人はその味に慣れてしまつたらしい。どうして今までの味を、私の作つた『はん』なんかで上書きできたのか、なんて分からなけれど、なんだかんだで海凶の爪では私がご飯担当になつた。

ドロワットだけでなく、ゴーシュにイエガー。

みんなも美味しいと言つてくれるから、作り甲斐はある。

「もう少しだから待つてなさい。ていうか、今朝はおめでとうとか言つてくれたのに、どうして私が作つてるのよ？」

嬉しいのは嬉しいけど、おめでとうと思つてくれているのなら、今田へりい変わつてほしい。

「だつて、シズちゃんの『飯美味しいんだもん』

「ああ。それにシズ以外の料理は食べたくない」

「シズクの料理はベリー美味しいでえす」

「つ・・・そ、そんなに褒めても、ご飯多めに作ってあげたりはないんだからね！／＼／＼」

「シズちゃん、顔あか～い」

「赤くない」

「可愛いぞ？」

「やはり、まだまだレディでえすね～」

「・・・いいもん。そんな意地悪言つ人たちには作ってあげないもん」

「「「え」」」

作りかけのご飯を放つて私は少しむくれながら浴室がある一階へ登つていった。部屋に入つて隅っこで壁の方を向いて膝を抱える。少しして騒がしい足音が聞こえてきて、ノックもなしに部屋の扉が開かれて、誰か入ってきた。

「「シズ（ちゃん）ー。」」
「シズク！」

かなり慌てた様子で、イエガー達が私を呼び、私はまだ少しむくれながら振り向いた。

「ぐはっー。」

振り向いただけなのに何故かゴーシュが氣絶してしまった。

何故？

「うわあー、ゴーシュちゃん！確かに今のは効いたけど、氣をしつかりー！」

「なかなか・・・やるよつになりましたね」

いや、私何もしていないんだけど・・・。

「か、かわ・・・」

「ゴーシュちゃんあああああん！ー」

結局、その後、ドロワットトイエガードもつきのじとを謝ってくれたから、私も大人気ないことしたなと反省し、また下に降りて料理を再開した。

ゴーシュが目を覚ましたのは、朝食が終わって一時間くらいしてからだった。

左右から迫つてくる剣を双剣で受け止めて、ドロワットに足払い、ゴーシュにウインドカッターを放つ。一人ともやっぱり私より場慣れしているだけあって、動きが早く、剣を止められた瞬間にはもう動く準備をしていた。

二人の戦いは、二人で一人とでも言えればいいのか、連携が見事に取れている。

踊るような戦い方も見ていると、戦闘中にもかかわらず凄いな、と思ってしまう。

ゴーシュが詠唱を始めドロワットが邪魔をしようとする私に攻撃を仕掛けてくる。

上段から振り下ろされる剣を受け止め、反撃をしようとした時、

「イラプショーン！」

ゴーシュの術が発動した。

ドロワットはタイミングが分かっていたように、発動すると同時に離れ、ゴーシュの側に行つた。マジックガードで防ぎながら噴火が収まるのを待つていると、二人が構えていた。

次の瞬間。

「「衝破十文字！」」

正しく目にもとまらぬと言つた早さで向かつてくる。

「ハツ！」

「ハツ！」

二人の剣を下から上へと斜めに切り上げて、弾くと一人は衝撃を受け流せず仰け反つた。

ゴーシュの胸元をトンと押して転倒させ、ドロワットの後ろに回り込んで首もとに剣を持って行き、転けたゴーシュにも剣先を向ける。

パチパチと、小さな拍手が聞こえて、見てみると屋根の上に座つて

見ていたイエガーがいた。

剣を納めて、ゴーシュの手を引っ張つて立たせて、どこにも怪我がないか確認して、ドロワットの方も確認する。幸い二人ともかすり傷程度で済んでいた。

「なかなかグッズな戦いでした。ゴーシュもドロワットも、そしてシズクも確実に成長していマスね」

「へへ～ん」

「ありがとうございます！」

「ふふ」

「二人とも嬉しそうにしていて、私はそんな二人を見て微笑ましくなつた。

「今日から五日はオフですからね。三人とも、自由に過ごしていいデスよ？」

そう言われて、ゴーシュとドロワットはまた喜び、私はまた二人の手がかりを捜そうと思って、ダングレストに行こうとしたけど、何故かゴーシュとドロワットに両腕をホールドされて問答無用で連行された。

そんな私たちの様子をイエガーはまるで娘達を見るような眼差しで見ていた。

そして、一日後、カプワ・トリムに到着した私たちはイエガーが、お金を寄付している孤児院にいる。この一年の間に、私も何度も来て、一緒に遊んだりしたから結構仲良しなっている。

「じゅくお姉ちゃん！これあげる！」

そうこうして小さな女の子、ミシールは縁が七色に彩られた鏡を私に差し出してきた。

「え？ でも、いいの？ こんなに素敵な鏡」

「うん。わたしがじゅくお姉ちゃんの方が持つてて似合つから！」

「あら、嬉しこ」と言つてくれるわね？ それじゃ、貰つてもいい？

「うん！」

「ありがとう。大切にするわね？」

鏡を受け取つてミシールの頭を撫でると、嬉しそうに目を細めた。

それから暫く子どもたちと遊んで、外に出ると、なにやら見知ったおじさんが殆ど赤に統一された格好をした女の子に追いかけられた。

「おー！」

一瞬こひつちを見ただけでおじさんはすぐじびつかに行つて、その後を女の子が

「待ちなさい！」

と元氣に追いかけていった。

「相変わらず凄いギャップね・・・」

咳いて、何となく髪でも直そつかなと思つて、鏡を見るとハリハリ

「『え?』」

そこに私の顔は映つていなくて

「あ・・・あ・・・旭！」

旭がいた。

「えっと……身長一六七？ 体重秘密」

「黒髪ストレートで腰まである。瞳も黒」

「黒の半袖」回り黒のスカート

「そしてやつぱつ黒のロングコートと黒のブーツ」

「……最後に、黒い双剣……」

「な、なによ？」

「……そんなに黒が好きなの（か）？」

「そ、揃えたら自然とそうなったのよー良いでしょ？ 別に。はいー」の話はもうお終いー帰るわよー」

「まあー」

「照れなぐてもいいのにな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7627y/>

狩谷雲の物語

2011年11月23日20時47分発行